

アジア系留学生のヘルパー志向性に関する研究

水 野 治 久

問題と目的

留学生の増加に伴い、国立大学を中心に留学生相談を担当する教官の配置が進み、留学生に対する援助の体制や方法についての報告や問題が提議されるようになってきた(田中、一九九三・鈴木・堀・井上、一九九五)。

しかし、留学生の適応と援助の関連を調べた研究では、人間関係や情緒の領域では指導教官や留学生から援助が多いほど適応しているが、研究領域で指導教官や学外の日本人から援助が多いほど不適応であるとする結果(山本、一九八六)、来日初期のサポートは適応を促進するが、時間が経過するとサポートと適応の関連がなくなるといった調査結果(周、一九九五)がある。こうした研

究結果は、留学生への援助が適応に結び付くことが難しいことを示唆している。

事実、松原・石隈(一九九三)は、留学生相談室の来談状況を調査した結果、留学生が持ち込んでくる相談の内容は言語問題と経済問題が多く、生活問題、健康問題、修学問題と続き、人間関係や文化の問題は少なかったとしている。その理由として松原らは、留学生は心理的な問題を日本人カウンセラーやアドバイザーに相談することと抵抗があるかもしれないと分析している。

留学生が心理的援助を受けることに対して抵抗を示すことは以前から指摘されていた(Alexander et al., 1976)。Mau & Jepsen (1990) は、大学院に在籍するアメリカ人学生と中国人留学生の理想的な援助者を比較

した。調査対象者は、十項目の問題領域について理想的な援助者を、①友人、②両親、③指導教官、④カウンセラー、⑤臨床心理学者、⑥精神科医、⑦精神科以外の医師、⑧牧師又は宗教家、⑨配偶者、⑩援助者なしの中から選ぶように指示された。

その結果、健康問題では「医師」、経済的問題では「両親」、社会心理的問題（例えば対人関係が上手くいかない）、個人心理的問題（例えば自尊心の欠如）、恋愛・性・結婚の問題、家族問題では「友人」、道徳・宗教的問題では「援助者なし」、勉強の問題では「指導教官」をあげたところでは両者は一致していた。しかし、職業・教育的問題において、留学生は「友人」を、アメリカ人学生は「指導教官」を選択したこと、精神病理では留学生は「援助者なし」を、アメリカ人学生は「精神科医」を選択したことについては違いが認められた。両者の理想的な援助者は、十項目の問題領域のうち、八項目では一致し、二項目で異なっていた。この結果から、留学生が援助を求める際に現地国の学生とは異なる援助者を選ぶ可能性があると言える。

そこで、水野・石隈（印刷中）は、留学生が問題を感じた時、誰に援助を求めるかという認知的枠組みに注目し、これを「被援助志向性」と定義し、①問題をどの程度自分で解決するか、「問題解決志向性」、②自分で問題が解決しない場合、どのヘルパーに援助を求めるかの「ヘルパー志向性」の二段階で測定した。石隈（一九九六a、b）は援助者を、援助サービスを日常の仕事の中心としている「専門的ヘルパー」、役割の一つあるいは一側面として援助サービスを行う「役割的ヘルパー」、職業や家族としての役割とは関係なく援助的機能を持つ「ボランティアヘルパー」に分類している。水野らは、この分類を留学生の援助者に援用し、専門的ヘルパーとして、保健管理センター・学生相談室のカウンセラー、留学生専門教育教官（留学生アドバイザー）を、役割的ヘルパーとして、指導教官、日本語担当教官、留学生事務担当者を、ボランティアヘルパーとして同国人の留学生をあげ、このヘルパーに対する志向性と適応の関連を、日本人学生の統制群を用いて調べた。

その結果、①留学生は日本人学生よりも、問題を自分で解決する傾向が強く、②留学生は日本人学生よりも、専門的ヘルパー及び、役割的ヘルパーに相談する傾向が

表1 調査対象者の属性

性別		
男性 113 名 (47.3%)	女性 126 名 (52.7%)	
平均年齢		
27.7 歳 (標準偏差: 4.8)		
出身国		
韓国 95 名 (39.8%)	中国 88 名 (36.8%)	台灣 56 名 (23.4%)
所属		
学部生 101 名 (42.2%)	研究生 31 名 (13.0%)	
修士課程学生 60 名 (25.1%)	博士課程学生 47 名 (19.7%)	
日本滞在期間		
1 年未満 35 名 (14.6%)	1 年以上 2 年未満 52 名 (21.8%)	
2 年以上 3 年未満 52 名 (21.8%)	3 年以上 4 年未満 29 名 (12.1%)	
4 年以上 5 年未満 30 名 (12.6%)	5 年以上 6 年未満 17 名 (7.1%)	
7 年以上 24 名 (10%)		

強いが、ボランティアヘルパーに相談する傾向は弱い、③留学生のヘルパー志向性と適応は、学習・研究領域、対人関係領域、住居・経済領域で関連がみられた。

この結果から、留学生のヘルパー志向性を高めていくことは、少なくとも学習・研究領域、対人関係領域、住居・経済領域で適応に結び付くと言え、ヘルパー志向性を高めていく活動も留学生への援助活動の一つとして位置づけられる。そのためには留学生のヘルパー志向性の構造を明らかにする必要がある。

そこで本研究では、①デモグラフィック要因とヘルパー志向性の関連、②ヘルパー志向性相互の関連を把握することを目的とする。

現在、各文化固有のカウンセリングを開発する必要性が指摘されている(Sue, D. & Sundberg, N. D., 1996)。本研究はこの指摘の基礎部分の実証データを収集する意義もある。

方法

調査対象

調査対象者は東北地区、関東甲信越地区、中部地区、

表2 主な調査項目

デモグラフィック要因

性別, 年齢, 出身国, 滞在期間, 所属, 専攻, 日本語能力

学習・研究領域の適応尺度

学習・研究領域の問題解決志向性

学習・研究領域のヘルパー志向性

心身健康領域の適応尺度

心身健康領域の問題解決志向性

心身健康領域のヘルパー志向性

対人関係領域の適応尺度

対人関係領域の問題解決志向性

対人関係領域のヘルパー志向性

日本文化領域の適応尺度

日本文化領域の問題解決志向性

日本文化領域のヘルパー志向性

住居・経済領域の適応尺度

住居・経済領域の問題解決志向性

住居・経済領域のヘルパー志向性

調査材料

阪神地区の国立・私立大学に在籍する留学生四六五名であった。質問紙は日本語で作成され、中国語・韓国語に翻訳された。翻訳の妥当性はバックトランスレーションにより確認された。調査期間は一九九六年六月二二日～七月二二日である。二八七票を回収し、記入漏れがあるもの、回答の仕方が雑で結果が読みとれないものは無効票とし、二三九票を有効回答とした。有効回答率は五一・四％であった。なお、対象者の属性は表一に示すとおりである。

留学生が適応しなければならない学習・研究領域、住居・経済領域、日本文化領域、心身健康領域、対人関係領域の五つの領域について、各ヘルパーへの志向性を質問した。なお主な調査項目は表二のとおりである。

ヘルパー志向性は、ヘルパーごとに四件法（相談しないと思う○点／かならず相談すると思う三点）で質問した。得点が高いほど志向性の程度が高いことを示す。

専門的ヘルパーは、「保健管理センター・学生相談

室カウンセラー」・「留学生専門教育教官(留学生アドバイザー)」への志向性得点の平均値、役割的ヘルパーは、「指導教官」、「日本語担当教官」、「留学生事務担当者」への志向性得点の平均値、ボランティアヘルパーは「同国人の留学生」への志向性得点とした。

実際の質問紙調査において対象者は、Baker, R.ら(1985, 1986)が開発し、山本(一九八六)、上原(一九九二)が在日留学生用適応尺度として改良した尺度を回答した後に、①問題をどの程度自分で解決するか、「問題解決志向性」、②自分で問題が解決しない場合、どのヘルパーに援助を求めるかの「ヘルパー志向性」に答えた。

結果と考察

①デモグラフィック要因とヘルパー志向性の関連

一、出身国との関連

ヘルパー志向性の出身国による差を明らかにするため、留学生の各ヘルパーへの志向性得点を従属変数とし、国別(韓国九五名、中国八八名、台湾五六名)を各要因とした一要因の分散分析を行なった。本研究の多重比較

は Duncan 法を用いた(表三参照)。専門的ヘルパー

専門的ヘルパーでは、心身健康領域において出身国の主効果が認められた($F[2,236] = 7.095, p < .01$)。多重比較の結果、台湾・韓国より中国の留学生の志向性得点が高いことが明らかになった。

心身健康領域は心理相談で扱うトピックが含まれている。全体的に志向性得点は低い、その中でも中国の留学生は台湾・韓国の留学生と比較して、こうした問題をカウンセラーやアドバイザーに相談する傾向が低いと言える。仮にこうした問題で中国の留学生が来談した場合、援助に対して抵抗感を持っていたり、問題がより深刻である可能性がある。援助にあたるカウンセラーやアドバイザーは留意する必要がある。

しかしながら、学習・研究領域、住居・経済領域、日本文化領域、対人関係領域では出身国による差はみられなかった。これらの問題は、留学生生活と直結しており、どの国の留学生でも援助を受ける必要がある。これが志向性得点に差がみられなかった理由ではないかと考えられる。

(39) アジア系留学生のヘルパー志向性に関する研究

表3 ヘルパー志向性平均値の出身国による違い (有効サンプル=239)

	韓 国	中 国	台 湾	F 値
専門的ヘルパー				
心身健康領域	.937 (.806)	.534 (.638)	.830 (.764)	7.095** 中国<台湾, 韓国
役割的ヘルパー				
日本文化領域	.765 (.656)	.678 (.614)	1.077 (.747)	6.506** 中国, 韓国<台湾
心身健康領域	.744 (.637)	.511 (.663)	.780 (.697)	3.899* 中国<台湾, 韓国
対人関係領域	.568 (.565)	.489 (.565)	.744 (.639)	3.318* 中国<台湾
ボランティアヘルパー				
学習・研究領域	1.190 (.704)	1.244 (.607)	1.670 (.689)	10.104** 中国, 韓国<台湾
住居・経済領域	.800 (.670)	.750 (.611)	1.089 (.793)	4.670* 中国, 韓国<台湾
日本文化領域	1.163 (.662)	1.102 (.653)	1.670 (.715)	13.833** 中国, 韓国<台湾
心身健康領域	.832 (.634)	.909 (.575)	1.420 (.645)	17.519** 中国, 韓国<台湾
対人関係領域	.984 (.629)	.835 (.524)	1.429 (.650)	17.400** 中国, 韓国<台湾

() は標準偏差, * $P<.05$, ** $P<.01$

役割的ヘルパー

役割的ヘルパーでは、日本文化領域 ($F [2,236] = 6.506, p > .01$)、心身健康領域 ($F [2,236] = 3.899, p > .05$)、対人関係領域 ($F [2,236] = 3.318, p > .05$) において出身国の主効果が認められた。

多重比較の結果、日本文化領域においては台湾より中国・韓国の留学生、心身健康領域においては台湾・韓国より中国の留学生、対人関係領域においては台湾より中国の留学生の志向性得点が低いことが明らかになった。

ここでも留学生生活に直接関連のある学習・研究領域、住居・経済領域では出身国による差は認められなかった。勉強と住居・経済の問題は、役割的ヘルパーが直接担当する領域であるために、志向性得点に差が認められなかったのではないかと考えられる。

しかし、留学生の訴えが勉強や生活の

問題であっても、背後に日本文化、心身健康、対人関係の問題を抱えている可能性がある。相談事例によっては、現実的に対処可能な問題であっても、留学生のヘルパー志向性の程度を考慮に入れ、その背後にある問題にも注意しながら対応したい。可能であれば専門的ヘルパーと連携を組み、援助にあたる必要があると言えよう。

ボランティアヘルパー

ボランティアヘルパーでは、学習・研究領域 ($F [2.236] = 10.104, p < .01$)、住居・経済領域 ($F [2.236] = 4.670, p < .05$)、日本文化領域 ($F [2.236] = 13.833, p < .01$)、心身健康領域 ($F [2.236] = 17.519, p < .01$)、対人関係領域 ($F [2.236] = 17.400, p < .01$) において、出身国の主効果が認められた。

多重比較の結果、全ての領域で台湾より中国・韓国の留学生の志向性得点が低かった。ボランティアヘルパーは同国人留学生であり、援助は個人の自由意志に委ねられている。ボランティアヘルパーの全ての領域において、出身国による差がみられたことは、留学生が同国人留学生へ供給する援助の量及び質に、国による差がある可能性が考えられる。現在まで、留学生の援助は同国人同士

からのサポートが中心であるとの指摘(高井、一九九四)から、援助活動は主に、留学生会等の同国人同士のネットワークを中心に行われる傾向があったが、必ずしもこの援助方法が全ての国に有効ではないことをこの結果は示している。

二、所属との関連

ヘルパー志向性の所属による差を明らかにするために、留学生の各ヘルパーへの志向性得点を従属変数とし、所属(学部生一〇一名、研究生三一名、修士課程学生六〇名、博士課程学生四七名)を各要因とした一要因の分散分析を行なった。本研究の多重比較はDuncan法を用いた(表四参照)。

専門的ヘルパー

専門的ヘルパーでは、学習・研究領域において所属の主効果が認められた($F [3.236] = 2.947, p < .05$)。多重比較の結果、学部生・研究生より修士課程学生の志向性得点が低かった。

研究生は、大学院正規課程の入学試験を控えているため不安感が強い。また、学部生においては、まず大学の学習スキルを習得し、勉強面で適応することが課題とな

(41) アジア系留学生のヘルパー志向性に関する研究

表4 ヘルパー志向性平均値の所属による違い (有効サンプル=239)

	学 部 生	研 究 生	修士課程	博士課程	F 値
専門的ヘルパー 学習・研究領域	.777 (.630)	.919 (.838)	.533 (.676)	.585 (.789)	2.947* 修士<学部, 研究生
役割的ヘルパー 心身健康領域	.706 (.669)	.925 (.787)	.567 (.621)	.539 (.604)	2.733* 修士, 博士<研究生
ボランティアヘルパー 学習・研究領域	1.371 (.670)	1.565 (.834)	1.317 (.670)	1.064 (.595)	3.757* 博士<学部, 研究生
住居・経済領域	.787 (.646)	1.194 (.813)	.900 (.752)	.692 (.537)	3.902** 学部, 博士<研究生
心身健康領域	.990 (.612)	1.274 (.773)	1.050 (.675)	.766 (.579)	4.061** 学部, 博士<研究生
対人関係領域	.975 (.602)	1.307 (.792)	1.108 (.604)	.883 (.592)	3.426* 博士<修士 学部, 博士<研究生

() は標準偏差, * $P < .05$, ** $P < .01$

る。これが、比較的身分が安定し、大学生活も経験している修士課程学生より、研究生・学部生の志向性得点が低くなった理由ではないかと考えられる。

役割的ヘルパー

役割的ヘルパーでは、心身健康領域において、所属による主効果が認められた ($F [3,235] = 2.733, p < .05$)。

多重比較の結果、研究生より修士課程学生・博士課程学生の志向性得点が低かった。大学院においては研究生より、修士課程・博士課程学生の身分が安定している。

これが、研究生より修士課程・博士課程学生の志向性得点が低くなった理由として考えられる。

ボランティアヘルパー

ボランティアヘルパーでは、学習・研究領域 ($F [3,235] = 3.757, p < .05$)、住居・経済領域 ($F [3,235] = 3.902, p < .01$)、心身健康領域 ($F [3,235] = 4.061, p < .01$)、対人関係領域 ($F [3,235] = 3.426, p < .05$) において所属による主効果が認められた。

多重比較の結果、学習・研究領域においては、学部生・研究生より博士課程学生、住居・経済領域においては、研究生より学部生・博士課程学生の志向性得点が低

かった。心身健康領域においては、研究生より学部生・博士課程学生、修士課程学生より博士課程学生の志向性得点が低かった。対人関係領域においては研究生より学部生・博士課程学生の志向性得点が低かった。

有意差が認められた全ての領域について、博士課程学生の志向性得点が低く、研究生の志向性得点が高いという結果になった。博士課程の学生にとって、同じ国の留学生は、学位を目指すライバルとして位置づけられるので、援助を求めたがらないのかも知れない。また、博士課程の学生は、学部生、研究生、修士課程学生と比較して、年齢の高い学生が多く、その分独立しており、そもそも他者に援助を求めないのかも知れない。研究生については、不安定な身分から援助に対する志向性が高くなっていると考えられる。

また、住居・経済領域、心身健康領域、対人関係領域においては学部生の志向性得点が研究生より低かった。この理由として、学部生の場合はいくつかの問題についてボランティアヘルパーである同国人留学生よりも、他のヘルパーに援助を求めている可能性が考えられる。

三、滞在期間との関連

表5 ヘルパー志向性平均値の滞在期間による違い(有効サンプル=239)

	短期滞在者	中期滞在者	長期滞在者	F 値
ボランティアヘルパー 学習・研究領域	1.397 (.704)	1.463 (.711)	1.070 (.587)	7.257** 長期<短期, 中期
日本文化領域	1.264 (.781)	1.395 (.688)	1.099 (.601)	3.398* 長期<中期

() は標準偏差, * $P<.05$ ** $P<.01$

ヘルパー志向性の滞在期間による差を明らかにするために、留学生の各ヘルパーへの志向性得点を従属変数とし、滞在期間を各要因とした一要因の分散分析を行った。滞在期間は、二年未満の短期滞在者(八七名)、二年以上四年未満の中期滞在者(八一名)、四年以上の長期滞在者(七一名)の三群に分けた。

その結果、ボランティアヘルパーの学習・研究領域($F[2,236] = 7.257, p < .01$)及び日本文化領域($F[2,236] = 3.398, p < .05$)において滞在期間の主効果が認められた(表五参照)。多重比較の結果、学習・

研究領域では短期・中期滞在者より長期滞在者の志向性得点が低く、日本文化領域では中期滞在者より長期滞在者の志向性得点が低かった。

この結果から、長期間滞在すると、学習・研究領域、日本文化領域のボランティアヘルパーからの援助の必要性が低くなると考えられる。特に学習・研究領域では、来日当初は同国人留学生がサポートの供給源になるが、滞在期間が長くなるとお互いにライバルであるという意識が芽生えてくるのかも知れない。勉強・研究面での適応に問題のある留学生に対して、同国人留学生にサポートを依頼し、ケアする場合には本人のヘルパー志向性に注意する必要がある。

しかし、専門的ヘルパー・役割的ヘルパーへの志向性については有意な差はみられなかった。この結果は、専門的・役割的ヘルパーへの志向性が滞在期間によって影響されにくいことを意味しており、たとえ滞在期間が長い留学生でも介入の仕方によってはヘルパー志向性を上げることができる可能性を示している。

四、日本語能力による違い

日本語能力については、対象者に初級、中級、上級の

表6 日本語能力とヘルパー志向性の比較

留学生 N=239

要 因	グ ル ー プ	平均値	標準偏差	t 値
ボランティアヘルパー 日本文化領域	日本語能力初級・中級	1.39	.762	2.31*
	日本語能力上級	1.17	.656	

* $p < .05$

中から自己評定してもらった。その結果、初級八名、中級八八名、上級一四三名と分布にばらつきがみられたため、初級・中級九六名、上級一四三名の二群で比較した。各領域の志向性得点をt検定で比較したところ、ボランティアヘルパーの日本文化領域 ($t [182.75] = 2.31, p < .05$) において、初級・中級と答えた留学生よりも、上級と答えた留学生の志向性得点が低かった(表六参照)。

日本語能力が上昇すると、日本文化に関する知識も増え、ボランティアヘルパーに対する志向性得点を低下させると考えられる。ボランティアヘルパーの日本文化領域以外では、日本語能力による違いはみられなかった。

もちろん、この結果は、日本語

能力を自己評定に頼ったこと、初級と答えた留学生が八名と少なかったことなど調査の方法論上の課題も残る。

しかし、調査結果を見る限り、日本語能力と専門的・役割的ヘルパーの志向性得点は関連がなく、初級・中級の留学生においても介入の仕方によってはヘルパー志向性を上げることができると可能性を示している。

② ヘルパー志向性の構造

一、各領域の志向性同士の関連

各領域の志向性同士の関連を明らかにするためにヘルパー毎の各領域で相関分析を行った(表七・八・九参照)。

専門的ヘルパーにおいては、全ての領域において中程度以上の相関が認められ、特に日本文化領域と対人関係領域において強い相関を示した。

役割的ヘルパーにおいては、全ての領域において中程度以上の相関が認められ、特に対人関係領域と日本文化領域、対人関係領域と心身健康領域において強い相関を示した。

ボランティアヘルパーにおいては、全ての領域において中程度以上の相関が認められ、特に対人関係

表7 専門的ヘルパーの各領域同士の相関

	学習・研究	住居・経済	日本文化	心身健康
学習・研究				
住居・経済	.527**			
日本文化	.619**	.687**		
心身健康	.650**	.554**	.658**	
対人関係	.605**	.680**	.790**	.623**

**p<.01

表8 役割的ヘルパーの各領域同士の相関

	学習・研究	住居・経済	日本文化	心身健康
学習・研究				
住居・経済	.540**			
日本文化	.568**	.624**		
心身健康	.654**	.656**	.691**	
対人関係	.608**	.639**	.765**	.762**

**p<.01

領域と日本文化領域、対人関係領域と心身健康領域において強い相関を示した。

この結果から、ヘルパー内の各領域は相互に関連しており、領域にかかわらず、留学生の援助を行うことはそ

(45) アジア系留学生のヘルパー志向性に関する研究

表 9 ボランティアヘルパーの各領域同士の相関

	学習・研究	住居・経済	日本文化	心身健康
学習・研究				
住居・経済	.577**			
日本文化	.622**	.595**		
心身健康	.679**	.627**	.659**	
対人関係	.641**	.648**	.731**	.707**

**p<.01

二、ヘルパー同士の志向性得点の関連
ヘルパー同士の志向性得点の関連を把握するために、

査が必要であるが、両者が関連している可能性も否定できない。

のヘルパーに対する志向性を上げることにつながると言える。加えて、ヘルパーによって若干の違いはあるものの、日本文化領域、対人関係領域、心身健康領域では強い相関がみられた。この三つの領域は、学習・研究領域、住居・経済領域と比較して、やや内面的な問題を含む。留学生の相談内容と志向性の関連を明らかにするために、更なる調査

表 10 各ヘルパー同士の相関

	専門的ヘルパー	役割的ヘルパー	ボランティアヘルパー
専門的ヘルパー			
役割的ヘルパー	.774**		
ボランティアヘルパー	.403**	.429**	

**p<.01

専門的ヘルパー、役割的ヘルパー、ボランティアヘルパーについて志向性得点の平均値を算出し、相関分析を行った(表十参照)。

その結果、ヘルパー同士は有意な相関が認められたが、中でも専門的ヘルパーと役割的ヘルパーは強い相関を示した。これは、専門的ヘルパーに援助を志向する留学生は役割的ヘルパーにも援助を志向する程度が高いことを意味する。

しかし、ボランティアヘルパーと専門的ヘルパー及び役割的ヘルパーは、強い相関は認められなかった。留学生の専門的ヘルパーと役割的ヘルパーに対して援助を求める意識と、ボランティアヘルパーに対して援助を

求める意識は異なる可能性があり、更なる調査が期待される。

まとめ

出身国によるヘルパー志向性の違いは、各ヘルパーにおいて有意差が認められた領域をみると、台湾より中国や韓国の留学生の志向性得点が低いという結果になった。今後はなぜ中国や韓国の留学生の志向性得点が低いのか、逆になぜ台湾の留学生の志向性得点が高いのかを、量的調査だけではなく、質的にも調査する必要がある。

所属によるヘルパー志向性の違いでは、各ヘルパーにおいて有意になった領域をみると、ヘルパーにより若干の違いがみられたものの、研究生より、博士課程の学生の志向性得点が低い傾向が認められた。研究生は日本の大学生活への適応に加え、修士課程・博士課程への入学試験を受けなければならない。こうした制度的な不安定さが援助に対する志向性を高めている可能性がある。博士課程の学生については、滞在期間が長く年齢も高いので志向性得点が他の学生と比較して低くなっていると考えられる。

滞在期間、日本語能力についてはボランティアヘルパーの一部の領域と関連がみられた他は、有意な差は認められなかった。日本語能力との関連は調査の方法論上の課題もあるので、更なる検討が必要である。

各ヘルパー内の領域の関連については、相互に高い相関がみられた。このことは、一つの領域で援助を志向する留学生は他の領域でも援助を求める傾向にあり、どのような援助内容であっても援助を積み上げていく必要性があることを意味する。

ヘルパー同士の関係では、専門的ヘルパーと役割的ヘルパーにおいて強い相関がみられた。今後は、専門的ヘルパーがいかに、役割的ヘルパーである指導教官、日本語担当教官、留学生事務担当者とチームを組んで援助を供給するかが課題となる。

ボランティアヘルパーと、専門的ヘルパー・役割的ヘルパーとの関連は、有意な相関がみられたものの、専門的ヘルパーと役割的ヘルパーほど強い相関はみられなかった。ボランティアヘルパーは専門的・役割的ヘルパーとは違い、個人の自由意志で援助するので、その活用が難しい。留学生の国籍によっては志向性が高い国もあり、

こうした援助資源をどのように活用すべきかが、今後の課題である。

本研究の課題として、①サンプル数が限られており、より細かい分析は不可能であったこと、②調査結果が、各大学の留学生受け入れの環境や、同国人留学生同士のサポート環境と密接に関連しており、こうした要因の分析が十分だったことがあげられる。

今後は、①なぜ特定の国や所属によってヘルパー志向性が異なるかを説明すること、②ヘルパー志向性に関連の深い介入可能な変数を抽出すること、③どのような取り組みをしていけばヘルパー志向性を上げることができのかを、実践の課題として考えていく必要がある。

〔付記〕

- ・本研究はJAFSA (外国人留学生問題研究会) より研究助成を受けた。
- ・本研究の調査にご協力頂いた、留学生の皆様に感謝致します。
- ・本論文の作成にあたりご指導頂きました、筑波大学心理学系石隈利紀助教授、藤生英行助教授に深く感謝致します。

〔引用文献〕

- Alexander, A. A., Workneh, F., Klein, M. H., & Miller, M. H., 1976 Psychotherapy and the foreign student, In Pederson, P. B., Lonner, W. J., Draguns, J. G. & Trimble, J. E. (Eds.), *Counseling across cultures*. Honolulu: University of Hawaii Press. Pp. 82-97.
- Baker, W. R., McNeil, O. V., & Siryk, B. 1985 Expectation and reality in freshman adjustment to college, *Journal of Counseling Psychology*, 32, 94-103.
- Baker, W. R., & Siryk, B., 1986 Exploratory intervention with a scale measuring adjustment to college, *Journal of Counseling Psychology*, 33, 31-38.
- 石隈利紀 一九九六a 学校教育における援助システムと援助のコーディネート——教師・保護者・スクールカウンセラーの効果的な連携をめざして——こころの科学, 七〇, 二二—三〇
- 石隈利紀 一九九六b 学校心理学に基づく学校カウンセリングとは カウンセリング研究, 二九, 二二六—二三九
- 松原達哉・石隈利紀 一九九三 外国人留学生相談の実態 カウンセリング研究, 二六, 一四六—一五五
- Mau, W., Jepsen, D. A., 1990 Help-seeking perceptions and behaviors: A comparison of Chinese and American graduate students, *Journal of Multicultural Counseling and Development*, 18, 94-104.

水野治久・石隈利紀(印刷中) アジア系留学生の被援助志向性と適応に関する研究 カウンセリング研究

Sue, D. & Sundberg, N. D. 1996 Research and research hypotheses about effectiveness in intercultural counseling. In Pedersen, P. B., Draguns, J. G., Lonner, W. J., & Trimble, J. E. (eds), *Counseling Across cultures*, Thousand Oaks, California: Sage. Pp. 323-352.

周玉慧 一九九五 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討―在日中国系留学生を対象として―心理学研究、六六、三三〇〜四〇

鈴木康明 堀洋道 井上孝代 一九九五 異文化間カウンセリングにおけるカウンセラーの役割に関する研究―外国人留学生を対象とする事例から― 教育相談研究(筑波大学

学校教育部)、三三、一七〜二四

高井次郎 一九九四 日本人との交流と在日留学生の異文化

適応 異文化間教育、八、一〇六〜一一六

田中共子 一九九三 「留学生」相談の領域 学生相談研究

一四、七三〜八二

上原麻子 一九九二 外国人留学生の日本語上達と適応に関する基礎的研究 平成二年度科学研究費補助金研究成果報告書

山本多喜司 一九八六 異文化環境への適応に関する環境心理学的研究 昭和六〇年度科学研究費補助金研究成果報告書

(一橋大学専任講師)